大津市歴史博物館企画展「紫式部と祈りの世界」会期：令和六年四月二七日～五月一九日

［展示No.2］国宝　藤原道長経筒　寛弘四年（一〇〇七）　奈良・金峯神社蔵

願文（現代語訳）※訳文は大津市歴史博物館作成。

南贍部洲にある大日本国の左大臣で正二位の私、藤原道長は、百日の間身を清めて、仏に帰依する人々を率いて、寛弘四年（一〇〇七）秋八月に吉野にある金峯山に上り、自分で書き写した法華経一部八巻、無量義経、観普賢経それぞれ一巻ずつ、阿弥陀経一巻、弥勒上生・下生・成仏経それぞれ一巻ずつ、般若心経一巻、合わせて十五巻をこの経筒に納め、金峯山に埋め、その上に金銅の燈楼を立てて火を灯し、今日から弥勒菩薩が如来として現れになる時を待ちたいと思います。

仏弟子である私は、お香を焚き、合掌して、蔵王権現に申し上げます。法華経は釈迦の恩に報いるため、弥勒菩薩に出会うため、蔵王権現と親しくなるため、そして自らが最高の悟りを得たいがために書き写しました。はじめ、長徳四年（九九八）に書き写して金峯山にお持ちしようと考えておりましたが、疫病が流行していたためにできませんでした。そのため、まず京の都にて供養だけは済ませました。今また金峯山に埋めようとするのは、初心を貫徹し、当初の願いをかなえるためです。

阿弥陀経は自分が死ぬときに心を乱さず、阿弥陀を念じて極楽世界へ往生するために書き写しました。そして弥勒経は、五六億七〇〇〇万年後に弥勒菩薩が如来としてこの世にお姿を現す時に、極楽世界からその場に赴いて弥勒にお会いし、法華会を聴聞し、その時に自らが埋めた経巻が自然に湧き出てその場に集まった人々を喜ばせたいと思い、書き写しました。

仏弟子の私は、前世からの命運を受けて、今日の事を深く知りました。それは天台大師智顗が霊鷲山で釈迦の説法を聞く自分の姿を見たという話のようであり、文殊菩薩が前世を一瞬で識ることのようでもあります。

ああ、私は悟りを得たいと強く願い、これまで犯してきた多くの罪を悔いています。私のこの固い信心を、金峯山に加えさせてください。法身の舎利を埋めて、釈迦の哀れみを仰ぎます。信心を込めて書いた経典を納め、龍神の守護をお願いします。私の願いはすでに固く、私の望みはすでに足りています。

そもそも木陰に憩い、小川の水を飲むことも、これもまさにご縁です。とすれば、今一緒に来た人々や、お供えの花や代理で私の行為に関係する人も、経典や文章を書いたり、お供えを作ったりしてお手伝いしてくれる人もまたご縁です。

仏教の祖である釈迦、蔵王権現、あなた方が見聞きしたことが正しいと証明され、願いが叶うのであれば神仏の力におすがりし、私の願いを不足なく叶えてください。この世界に生きとし生けるものはこの橋渡しにより、皆が仏に見え、仏法を聴聞するご縁を結びたいと願います。仏弟子である道長が敬って申し上げます。

寛弘四年丁未八月十一日

大津市歴史博物館企画展「紫式部と祈りの世界」会期：令和六年四月二七日～五月一九日

［展示No.3］国宝　宝相華文経箱　長元四年（一〇三一）　比叡山延暦寺蔵

藤原道長の娘で一条天皇の中宮となった彰子が造らせた経箱。この経箱が比叡山横川の地に納められた経緯については、延暦寺青蓮院の記録をまとめた『門葉記』収録の願文によって知られています。

女院御願文案上東門院正文在　**（『門葉記』第七九「如法経濫觴類聚記」所収）**

（現代語訳）※訳文は大津市歴史博物館作成。

法華経八巻を、決まりを守って書き写し、比叡山の横川にある慈覚大師円仁の如法堂にお納めいたします。人が作った紙と墨を用いて書き写し、はかない作りのものをお納めしましたので、一般の人々からすれば、すぐに朽ちてしまうと思われてしまうでしょう。しかし、真実の理は常にそこにあって朽ちず、様々に素晴らしいものを備えているのです。私の願いが清らかでかつ固ければ、自然とそのようになるのです。

そういった理由で、私が書き写したこの経典は、美しい宝石に勝るものとなって、宝石でできた塔のなかにいらっしゃって、弥勒菩薩が如来として現れる五六億七〇〇〇万年後の世界まで伝わり、釈迦の教えが無くなってしまう時でも、この経典はいらっしゃって、人々をお救いくださいます。もし弥勒がいらっしゃらない時は、この経を頼りにして、人々をお救いください。弥勒にはまた次の如来へ託されて、いつの時代も絶えず人々をお救いください。

この素晴らしい行いによって、わが国の天皇が平穏に、人々が安らかに暮らせますように。この世に生きる全ての人々をお救いください。私はいずれ輪廻する世界を出て、必ず極楽浄土に生まれて、悟りを得る修行をして、早く仏になって人々をお救いします。また極楽浄土に生まれた後は、この経典によって人々をお救いします。弥勒がこの世に現れたのであれば直接お会いし、この経典によって人々をお救いします。

この経典をお納めすることは、慈覚大師円仁が如法経を書いた時の誓いと心を同じくすることです。この思いによって、これからずっと、慈覚大師円仁と互いに善い友人となって、お勤めを助け、人々をお救いする人になりたいと思います。

このように深い誠の心を、釈迦如来・多宝如来・阿弥陀如来・普賢菩薩・文殊菩薩・観音菩薩・勢至菩薩をはじめとした全ての仏の光に照らしていただき、私の願いが叶うところを必ず見ていてください。

長元四年十月二十七日

菩薩比丘尼

この願文と書き写された如法経をさらに加えて経箱に納め終わるという。